
私を G と呼ばないで

sh

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私をGと叫ばないで

【Nコード】

N8559V

【作者名】

sh

【あらすじ】

テンプレ的に死に転生することとなった私、原作介入？そんな死に急ぐことはありません。

と思っていた時期も私にもありました。

私は、早乙女ハルナとして転生してしまったのだ。

プロローグ（前書き）

ご指摘を受け一部の能力を修正しました。

プロローグ

テンプレ的に死んだ私は神と名乗る男に出会った。

そしてこれまたテンプレ的に転生をさせてくれるらしく、そのうえ特典を5つもくれるらしい。

なんて太っ腹な神なんだ。

特典は精神干涉系は駄目らしく、容姿や名前、転生の時期、生まれる国でも1つ特典を消費するのだそうなので、

【直感EX】・【演技力EX】・【幸運EX】・【完全魔法無効化能力】・【真祖レベルの再生能力】にした。

え？ネギ魔の世界なのに戦闘系が一個も無いって？

バカを言うな何が悲しくてせつかくの第2の人生を体験できるのに死に急ぐ真似をしなきゃなんんだ。

赤松ワールドはモブでも可愛い子が多く居るんだ。

わざわざリスクを負ってまでメインにこだわる必要なんて無い！

それにその世界には転生者も数人居るらしい。

そいつにハーレム願望があって、原作キャラに関わった所為で殺されましたは嫌過ぎる。

まあ、万が一巻き込まれたとしても生き残れるような特典を選んだのだし大丈夫だろう。

こうして私は転生した。

目指せ、平穏な生活！畳の上での天寿！

そうして私は

早乙女ハルナになった。

どうしてこうなった〜!!!

第1話 麻帆良学園

早乙女ハルナに転生して6年が過ぎた。

私は今、麻帆良に居る。

いや、行かないように抵抗したよ？

でも、両親に追い出される形で小学校から全寮制の麻帆良に通わせることになった。

何故かって？

嫌われてるからさ。

あれは本当に事故だった。

あれは私が3歳の時の事、

夜中、双子の妹のレイと寝ている時、父と母は夫婦喧嘩をしていたらしく、物が飛び交っていたらしい。

そのうち1本の包丁が私たちの方に飛んできたのだ。

その包丁はレイに刺さるはずだった。

家族を失うという不幸に対して【幸運EX】が発動したのだ。

具体的に言うと私が寝相でレイの上に覆いかぶさったのだ。

そして包丁は私の背中に刺さった。

両親は真っ青になって私に駆け寄ったが、そこで【真祖レベルの再生能力】が発動

刺さった包丁が自然に抜け落ち、深々と出来た刺し傷がものの10秒も立たずに感知したのだ。

それから両親は、私を化け物を見る目で見えるようになった。

早乙女ハルナに転生したことといい、刺傷事故といい【幸運EX】
肝心なときに役に立たねえ！

むしろ、【幸運EX】（笑）だろこれ！

いや、レイが助かったのは良かったよ？

それでももつと別の形で助けてほしかった。

唯一救いだっただのは、両親と私の会話を聞いたレイがよく意味は解
つてないのだろうけれど自分が私に助けられた事は理解したらしく、

レイが私に懐いてくれた事ぐらいだろう。

そんな訳で私は麻帆良にやってきた。

第2話 同居人（上）

私は寮の自分の部屋へ向かった。

寮は2人部屋らしく、もう一人はもう着いている様だ。

私が部屋に入ると、前髪で視界を隠した女の子が居た。

「は、ははは、初めまして、宮崎のどかです。これからよろしくお願ひしましゅ」

そこに居たのは原作キャラの宮崎のどかだった。

前世でも1番好きなキャラだったけれど、これは可愛すぎる。

特に最後に噛んだ事で顔を赤くしてアウアウ言っているところか

ヤバイ、この光景を見てると嗜虐心刺激される。

このまま眺めてもいいがSに目覚めそうなのでとりあえず止めるとしよう。

「私は早乙女ハルナ、よろしくね」

私はそう言って握手しようと手を差し伸べる。

「よ、よろしく願いします早乙女さん」

「これから6年間一緒に暮らすんだからハルナでいいよ。私ものどかつて呼ぶから」

本当は9年だけねどね。

「は、はい、ハルナさん」

「かったーい！そんな他人行儀じゃなくてハルナって呼び捨てでいいよ」

「ハ、ハルナ」

「良し！」

「それじゃあ引っ越し祝いとのどかとの共同生活を祝してパ〜ツとやろうか」

「パ〜ツと？」

「そ、パ―ツと、ちょうどキッチンも付いてるし」

そう、キッチンが付いているのだ。

小学生の2人部屋に。

それも、小学生でも使えるサイズのもが。

さっき確認したが包丁をはじめ調理器具完備で調味料もそろっているのだ。

流石に食材は入っていなかったけれど。

それでも麻帆良ハンパねえ。

それから、私とのどかは商店街に食材を買いに行った。

ただ、調子に乗って買いすぎたのもあるが、子供の体力舐めてた。

私ものどかも途中でバテてしまった。

そんな時、私の幸運か魔帆良の住人の気質か男の人が寮の前まで荷物を持ってくれると願い出てくれた。

寮の前で荷物を受け取るまでバテていて気が付かなかったが、のどかが怯えていた。

男性恐怖症はこの頃からだったようだ。

男の人がいなくなるとホッとしたのどかと食材を部屋へと運んだ。これだけ、豪華な寮にしなくていいからせめてエレベーターぐらい付けろよ。

と、部屋についた私はへばりながらのどかと語った。

それから、一休みした後、料理を開始した。

私が料理を始めると、のどかも手伝うと言って一緒に料理をするこ
ととなった。

のどかの手際は、前世で独身生活の長い私に比べるとあれだがこの
歳ではなかなかの手際だった。

少し…いや、結構不恰好だが出来た料理を2人で食べた。

味付けは、正直良いとは言え無いが、今までで、1番美味しく感じ
た。

第3話 同居人（下）（前書き）

この作品は1週間おきに更新する予定です。

第3話 同居人（下）

食事を終えて、私たちはお風呂に入ることにした。

最初は大浴場に行こうとしたが、のどかが頑なに嫌がったため、自室のお風呂に入ることとなった。

私は脱衣所で服を脱ぎ終わり、のどかに風呂に入ろうと即そうとのどかを見た。

のどかはタオルで体を隠していたが、それでも隠しきれておらず、所々に殴られたような痣があった。

のどかはタオルで隠しきれていないことに気付いて、私に泣きながら語ってくれた。

3歳の頃、両親が死に叔父夫婦に遺産目当てで引き取られ、叔父夫婦やその息子に虐待を受けていた事、

そして厄介払いのためにこの麻帆良に送られたらしい。

どうやら麻帆良は謎の失踪や事故死が多いにも関わらずるくに捜査もされず、ニュースにもならない為、

小学校から全寮制のこの学校は、子供を捨てたい親の間では有名なのだとか

出会ってまだ数時間しか経っていないのに、ここまで話してくれるほど信頼してくれたのは嬉しいことなのだが、

内容は決して良いものではなかった。

私は話を聞いた後、ここまで話してくれたのに自分の事を言わないのはフェアじゃないと思い、私の事も話す事にした。

【直感EX】も大丈夫と続けているのも理由の1つだ。

のどかの手を引きまだ荷解きしていないダンボールの山まで連れて行き、

私は自分の荷物からボールペンを取り出し、私の手に突き刺した。

のどかは目を見開き、急いで救急箱を取りに行こうとしたが、私がのどかの手を掴んで止めた。

私はボールペンを引き抜いて、のどかに見ているように言った。

そして、私の手の傷が見る見る治っていくのを見て驚愕した。

それから、私は転生の事は話さなかったが、

昔、親に包丁で刺されて、その傷が今みたいに治りそれを見た両親から化け物扱いされていた事を話し、

気持ち悪かったら離れて良い言っと、

のどかは、そんな事で離れたりしない、だからもうこんな事はしないでと泣きながら抱きついてきた。

そんな事言ってくれたのは前世でもこの世界でも初めてで、私は心から泣いてしまった。

タオル1枚しか身に纏っていない幼女2人が泣きながら抱き合っているのはとてもシユールだが今はこのままでいたいと思った。

私は、麻帆良に来ることが決まったとき、

原作のハルナのように演技し魔法に疑いは持つも気付かない振りを
して魔法に関わらない様にしようと考えていたが、

今は原作なんて関係ない魔法なんて危険なものにのどかを関わらせ
ないで、のどかが最大限幸せになれるようにしようと誓いを立てた。

翌日、ずっと半裸で居た為、2人そろって熱を出してぶっ倒れたの
は後の良い思い出だ。

第4話 宮崎のどか（上）

私、宮崎のどかは3歳の頃から不思議な夢を見ます。

夢は物語の様に繋がっていて、とても不思議な夢でした。

夢の私は、親友のゆえゆえとパルの3人で平凡だけれどとても幸せな日々を過ごしていました。

それに転機が訪れたのは中学2年の冬、私は1人の男の子ネギ・スプリングフィールドに恋をした。

夢の私も男性恐怖症なのに何故か恋をしてしまった。

ゆえゆえやパルは私の恋が成就するように色々手伝ってくれた。

そして修学旅行で告白をしたが友達から始めましようと言われ、友達になってキスをした。

次の日、夢の私はネギ先生の後をつけ魔法を知った。

それから夢の私はゆえゆえを巻き込み、パルを巻き込み、ネギ・スプリングフィールドと魔法にのめり込んでいった。

そして、私たちは魔法世界に行き終末を迎えます。

ネギ・スプリングフィールドは年齢詐称薬を飲み、ナギ・スプリングフィールドとして、武道大会に出場しました。

そんな時、フェイト・アーウェルンクスに出会いました。

ネギ・スプリングフィールドとフェイト・アーウェルンクスとお茶を飲みながら相手を挑発しあった。

そんな折、フェイト・アーウェルンクスが私たちを全員無事に麻帆良に返してくれるという提案をした。

ネギ・スプリングフィールドはそれを断り戦闘が開始された。

だがその選択は間違いだった。

フェイト・アーウェルンクスは夢の私を石化させようとしたが、パルが私を庇って石化され粉々に砕け散って死んでしまった。

夢の私たちはパルが死んじやったのに数日もするとはしゃいでいた。

何で？親友じゃなかったの？

仲間じゃなかったの？

そんな考えをよそに夢は進んでいく、次に死んだのはゆえゆえだった。

アーティファクトで明日菜に変身した栞という少女に後ろから刺されて

そのすぐ後に月詠という少女に刻まれて私は殺された。

そんな夢を月に1回1週間かけて繰り返し見ている。

そんなある日の夜、トイレに向かう途中、叔父夫婦が私を麻帆良に送ると言っているのを聞いた。

夢に出て来た町の名前、私は自然に足が止まった。

夢の内容を照らし合わせると、話に出て来た麻帆良の行方不明は魔法に巻き込まれた。

事故やその捜査がされないのは認識阻害魔法の所為だろう。

魔法があればの話なのですからね。

麻帆良に行く2ヶ月前になると、例の夢を見なくなりました。

そして、麻帆良に付くと

そこは夢で見た町並みがありました。

寮に着いて、送っておいた荷物の整理を始めた。

私のダンボールの隣に同居人のダンボールもありました。

ふと目に入った同居人の名前は早乙女ハルナ。

夢に出て来たパルの名前だった。

いよいよもって夢が現実味を帯びてきた。

麻帆良はどこかで聞いて町並みはテレビか何かで見たという期待は

打ち砕けた。

流石に知らない人間の名前を知っているなんてありえないのだから。
ダンボールの前で呆然としていて、玄関の鍵が開き1人の少女が入ってきた。

その少女は夢で見たパルを幼くした姿そのものだった。

第5話 宮崎のどか（下）

早乙女さんは…ハルナは夢で見たそのままの性格をしていた。

家でも幼稚園でもずっと一人ぼっちだった私は、

月に一回見る夢のネギ・スプリングフィールドが出る前までのパルとゆえゆえとの平和な日常を見ることが生きている唯一の楽しみだった。

そんな、ただ見てるしか出来なかった幻を実体験することが出来た。

一緒に買い物に行つて、一緒に料理して、一緒にご飯を食べて

買い物は買いすぎて疲れたし、買い物帰りに会った親切な男の人は怖かったけれど、

こんなに楽しかったのはお父さんとお母さんが生きていた頃と同じ…うつん、それ以上に楽しかった。

ハルナが夢のパルより料理が上手だったことがこれは夢じゃない現実なんだと実感することが出来た。

そんな幸せな気分もハルナの大浴場に行こうという言葉で凍りついた。

幼稚園のとき、叔父夫婦に受けた虐待の痣をプールの着替え中に先生や友達に見られた。

その後、おそらく先生が心配してくれたのだろっ、児童相談所の職員が来た。

叔父夫婦は、職員を追い返し、虐待はより過激になった。

その話を知った友達の両親は自分の子に私に関わるなど言い聞かせた。

そうして私は孤立した。

だから怖い。

私の体はまだ痣が多く残っている。

大勢の人の前でこの体を見せたら、来週から始まる小学校生活でも孤立してしまうのではと恐怖で震えた。

そんな考えの傍らで、ハルナなら受け入れてくれるのではという思いもあった。

どの道、これから一緒に暮らす以上隠し通すことは不可能なのだから。

私は部屋に備え付けられたお風呂なら一緒に入るといって部屋のほうに入ることとなった。

小学生用のお風呂とはいえ、6年生になっても使ったため、

お風呂は大きく小学生になったばかりの私たちなら2人で使っても広々と使うことが出来る大きさだ。

脱衣所で服を脱いで痣が出来るだけ見えないように隠すがどうしても隠し切れなかった。

ハルナが早く入ろうと即そうとしてこちらを見た。

その時ハルナの顔が一瞬驚愕の顔となった。

これはおそらく普通の人なら気付きもしない、虐待を受けていたときに、よく相手の顔色を伺っていた私だからこそ気付いた些細な変化だった。

これを見ても何でもないように振舞うハルナになら話しても大丈夫だと思えた。

私は夢の事を除いて、私の生い立ちを話した。

結果、ハルナは受け入れてくれた。

ハルナは自分を信頼して秘密を打ち明けてくれたのに自分は秘密を打ち明けないのは嫌だと

私の手を引いて、まだ開けてないダンボールにつめた荷物を開き、中からボールペンを取り出した。

これのどこが秘密なのかと首を傾げそうになった時、ハルナはボールペンを振り上げ自分の手に突き刺した。

私は慌てて、部屋に備え付けで置いてあった救急箱を取りに行こうとしたがハルナに怪我していない方の手で止められた。

そして、ハルナは私に傷を見るように言った。

私は夢で私やゆえゆえのグロ描写を40回以上見ているので、目を瞑ったり泣いたり気絶したりしないが、

傷を見ると傷口から骨と床が見えるのであまり見たいと言えるものではなかった。

そんなハルナの傷がまるで、夢に出た近衛木乃香のアーティファクトを使った治癒をスローで再生するように直っていった。

流石にその光景には目を見開かずにはいらなかった。

それからハルナは自分の生い立ちを話、自分の事を化け物といった。

そして、こんな化け物と一緒に居たくないなら、距離をとるから言ってくれといった。

私はその力のことを聞いて、この世界に魔法がある事を確信した。

夢に出て来た神楽坂明日菜という人の魔法無効化体質と似たようなものだろう。

だが、そんな事よりもこんな事で化け物扱いするハルナの両親に対する怒りと、

そんな事で離れてしまうと思われた事が悲しくて、同じような事で悩んでいたさっきの自分自身が嫌になった。

そんな考えが心の大半を占めて、私は泣きながらそんな事で避けたりしない。

だからもうこんな事しないでと抱きつきながら言った…と、思う。

感情的になって言ったからはつきりとは覚えていない。

私達はそのまま泣き疲れて床で寝てしまった。

夜中、私は一度目が覚めた。

ハルナの寝顔を見ながら、夢に出て来たパルの過去ではなく、

一人の少女、友達のハルナとしてこの子を死なせないようにしようと誓いを立てた。

もし、ハルナの力を魔法使いたちに知られたら、魔法使いたちはハルナを壁として使うかもしれない。

いや、使うだろう。

魔法使いには自分勝手な人ばかりなのだから

その為にもハルナを魔法に近づけさせない。

私も魔法に近づかない。

夢のように私が魔法に関わったのが原因で芽づる式に皆を巻き込みたくない。

そんな決意を胸に、抱きついている眠ったハルナに目を向ける。

そして私は、ハルナの背に手を回し、もう一度眠りに付いた。

ハルナの体は温かった。

4月とはいえ、まだ肌寒い。

そんな中タオル一枚で寝ていたのだから、次の日は当然風邪を引いた。

第6話 近衛木乃香（上）

熱も下がり、入学式の5日前となった。

今日は1日荷物の整理に費やした。

普通なら数日はかかるのだろうけれど、私ものどこかも荷物なんてほとんど無いから1日ですんだ。

ここ麻帆良の寮では1学年で1つの階が決められている。

なので、新人生は皆この階に来るため、昨日今日と、部屋の前を引越しの業者の人たちが行きかっていて結構：いや、かなり賑やかだ。

そんな中、インターホンが鳴った。

私たちは、鍵を開けドアを開いた。

「こんばんわ、隣に引越してきた近衛木乃香います、よろしゅうお願いいたします」

そこに居たのは、近衛木乃香だった。

さ、最悪だー！！

木乃香は前世で好きなキャラだったけれど、魔法に関わりたくない自分にとって、あまりかわるべきではない人物だ。

ど、どうするよこれ!?

関るべきではないのだろうが、関らなければ他の転生者に感づかれる可能性がある。

どうする?

どっちが安全だ?

私の直感に関るなと言っている!

私の直感肝心なときに役に立たない【直感EX】(笑)

なら、逆を取れば安全のはず!

「私は早乙女ハルナ、よろしくね」

私はそう言って笑顔で手を差し出した。

第6話

近衛木乃香（上）（後書き）

私事が忙しくなってきたため更新が遅れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8559v/>

私をGと呼ばないで

2011年9月17日19時57分発行